2Ja-8

日本の一般家庭におけるカーペットから見た住まい方の研究
一高度経済成長期以降を中心に

○磯　映美　角野幸博（武庫川女大）

目的　カーペットがわが国の一般家庭で用いられるようになってからまだ日が浅い。その製造技術・施工法や、美術工芸品としてのペルシャ絨毯についての文献はいくつか見られるが一般家庭で日常的に用いられる敷物と住まい方との関わりについては、住まいの洋風化に結びつけられることが多く、それ以上の議論は生まれていない。カーペットを端緒としてわが国での住まい方の特色を明らかにする。

方法　①生産者側からの資料…国内カーペット産業の社史等文献及び関連業界新聞記事の検索、室内装飾施工・販売業者への聞き取り調査。②消費者側からの資料…インテリア雑誌・婦人雑誌の敷物関連記事、聞き取り調査。③日本の起居様式に関する文献・論文を参照。以上三つの観点から、今日までのカーペットの普及の経過を捉え、検討・分析する。

結果　①高度経済成長期以降の一般家庭でのカーペットの用いられ方の概要は次の通り。敷きつめ（無地ロール物）→帖物敷き込み（柄物→無地）→それらの上にピース敷き（シャギー）→板張り（ダニ・アレルギー問題による敷物離れ）→板の上にピース敷き（ウィルトン等パイル物→キリム・キルト等平織り物）。②カーペットはまず、土足・イス坐の大型建造物の床材として、耐久性が重視され用いられた。上足・ユカ坐の家庭ではインテリアの洋風化への道具としての視覚的要素とともに、クッション性、保温性といった触覚的要素が重視されてきた。そこには、「寝そべってもよい」という「くつろぎ・安楽」を意味する心理的要素が含まれ、畳・布団・座布団に対するのと共通する行為が観察される。

展望　以上の結果を基にし、わが国における「敷物による行為の限定及び意味空間の形成」についての研究へ発展させていく。